

いわゆる平曲古譜本について

著者	奥村 和子
引用	女子大文学. 国文篇 . 1998, 49, p.32-41
URL	http://doi.org/10.24729/00011088

いわゆる平曲古譜本について

奥村和子

一 平曲古譜本

平曲「古」譜本と言っても、その成立が江戸時代からそれほど遡れるものはない。譜本が必要となったのは、琵琶法師以外の学者や俳人等が趣味として平曲を語りだして後と考えられるからである。現在のところ最も古い時代の成立を言われている譜本は、室町時代成立説のある『平家書（金田一春彦氏所蔵）』であり、それに次ぐものとして『筑波大学所蔵平曲譜本』、『秦音曲鈔』等が挙げられている（注一）。本稿で主に扱う『昭和女子大学蔵平曲譜本』（以下『昭和本』）は、譜記その他様々な面で『平家書』に酷似した、「古譜本」の可能性を持つ本である。十二巻上下揃った完本だが、奥書の類はなく、その成立事情は詳らかでない。

本稿は、この『昭和本』の譜記を京都アクセント史料として

の観点等から分析しつつ、その「古譜本」性を検討しようとしたものである。

二 『昭和本』の譜記とアクセント

二一 調査方法及び調査結果

線条式ハカセ（「 \nearrow 」「 \searrow 」など）を用いる平曲譜本では、一般に「 \nearrow 」が高音（●）、「 \searrow 」が低音（○）を表すことが多い。『昭和本』の調査及びその結果検討を行なうにあたって、とりあえず「 \nearrow 」が高音、「 \searrow 」が低音を表すものと仮定して整理し、その結果現れる矛盾点から漸次その補訂を行なっていく。線に文字のついたハカセについても同様に扱う。

『昭和本』巻一上（含まれる章段は「祇園精舎」「殿上閣討」「鱸」「禿童」「我身栄花」「妓王」「二代后」「額打論」「清水炎

上「春宮立」の「白声」「口説」における二・三拍語（活用しない自立語に限る）の譜記を左記①～③の三つに分類して示すと、以下のようになる。用例数の下に「用例（頁数）」を示す。

① 譜記が、『平家正節』などから類推されるその語の江戸期京都アクセントと一致しているもの

② 無譜記（×で示す）の部分があるが、それ以外はアクセントと一致するもの

③ 譜記とアクセントが一致しないもの

【白声】

● アクセント1例

① / / 1例 「鄙」(100) 「

● アクセント5例

③ / / 5例 「年」(100) 「者」(72) 「

○ アクセント1例

① \ / 1例 「常」(107) 「

● アクセント2例

① / / 2例 「女」(73) 「娘」(110) 「

● アクセント5例

③ / / 5例 「命」(110) 「心」(101) 「

い わ ゆ る 平 曲 古 譜 本 に つ い て

○ アクセント5例

① / / 4例 「用意」(16) 「前世」(74) 「

③ / / 1例 「ひとり」(101) 「

【口説】

● アクセント27例

① / / 24例 「是」(127) 「誰」(48) 「

③ / / 1例 「それ」(128) 「

\ × 1例 「風」(48) 「

< / 1例 「亭」(76) 「

● アクセント77例

① / / 12例 「事」(80) 「皆」(49) 「

シ / 2例 「如何」(36) 「物」(119) 「

/ イ 1例 「道」(45) 「

/ ヲ 1例 「人」(10) 「

③ / / 46例 「家」(45) 「色」(141) 「

\ × 15例 「家」(52) 「時」(35) 「

○ アクセント29例

① / / 19例 「今」(129) 「今日」(81) 「

イ / 3例 「何」(81) 「船」(45) 「

② \ × 4例 「跡」(39) 「肩」(48) 「

③ // 1例 「父(148)」

\\ 2例 「さる(一程・155)」 「さる(一程・177)」

○ ● アクセント11例

① \\ 6例 「常(130)」 「春(155)」 …

イ \\ 2例 「露(174)」 「春(61)」

② \\ × 1例 「雨(48)」

③ // 2例 「宇治(39)」 「殊(155)」

● ● ● アクセント15例

① // 4例 「車(78)」 「使い(80)」 …

// 3例 「公卿(142)」 「資財(52)」 …

③ // 5例 「今年(130)」 「内裏(167)」 …

\\ 2例 「日来(126)」 「御堂(13)」

\\ × 1例 「車(53)」

● ● ● アクセント34例

① // 34例 「刀(23)」 「言葉(10)」

● ● ● アクセント54例

② // × 10例 「去年(178)」 「平家(136)」 …

シ \\ × 3例 「命(119)」 「情け(119)」 …

③ // 40例 「命(127)」 「心(86)」 …

\\ 1例 「心(10)」

○ ● ● アクセント13例

① // 1例 「浮世(128)」

\\ 2例 「御幸(167)」 「御幸(171)」

② × ハ × 1例 「妓王(95)」

③ // 3例 「いづく(37)」 「いづち(127)」 …

イ \\ 1例 「我身(45)」

// 2例 「御前(30)」 「備前(13)」

— × \\ 1例 「実否(32)」

\\ イ × 2例 「中衛(56)」 「中衛(56)」

○ ● ● アクセント24例

① // 11例 「かすか(140)」 「病(47)」 …

③ // 12例 「后(141)」 「一つ(126)」 …

\\ ハ 1例 「三度(88)」

【省略表記について】

「イ」「ヲ」は「\」の右下部分に「イ」「ヲトス」という文字が書かれているもの、「ハ」「シ」は「\」の下に「ハル」「シ」という文字のあるものを、それぞれ表す。

二二二 譜記の解釈

二二二一 『秦音曲鈔』との類似

線条式ハカセに文字が付いているものうち、最もよく用いられるのは「イ」であり、ほぼ「＼」同様低い音を表すと考えられるが、例外として「○●●—／イ×」という対応を示すものが2例存する。いずれも「中衛(56・口説)」に付された譜記であるが、この例については、波多野流古譜本とされる『秦音曲鈔』との関係を考えねばならない。『秦音曲鈔』でこの箇所も「中衛—／イ×(秦・一上44・口説)」「秦」は「秦音曲鈔」の用例である事を示す。「イ」は＼の右下部分に「イロ」と二文字が付いているもの(ととなっているのである)。

他譜本にあまり見られないこの「イ」という譜記は、『秦音曲鈔』において普通「けふ(○●●)—イ／(秦・一上64・口説)」「母(○●●)—イ／(秦・一上29・初重)」の如く低い音に対応する。ところが、語頭からの二拍に「／イ」という形で付いた場合には、「三年(○●●●●)—／イ××(秦・一上37・口説)」「出家(○●●●)—／イ×(秦・一上37・口説)」のように、「イ」二つの譜記がひとまとまりになって「○●●」を表す傾向がある。『昭和本』の「イ」についても同様に解釈す

れば、この「中衛—／イ×」は「○●●●」を反映していると考えられることができる。

また『秦音曲鈔』には、『昭和本』の「ヲトス」(「＼」の右下に「ヲトス」という文字のついた譜記。調査結果では「ヲ」と略記した)によく似た「ヲトシ」という譜記(「＼」の右下に「ヲトシ」という文字のついたもの)が頻出する。而してこの「ヲトシ」は、『京都大学本』等の一般の波多野流諸譜本には見られないが、波多野流節名目(『平語偶誌』の「波多野流古来節名目」、『波多野流詠曲師伝口訣』の「声節講義」、『追増平語偶談』の「波多野流曲節名目」等)にはその名が見える、いわば『秦音曲鈔』の持つ「波多野流古譜本」としての特徴なのである(注二)。「秦音曲鈔」ではこれが「口説」に頻出するのに対し、『昭和本』ではもっぱら「初重」「中音」等の曲節に現れるといった相違はあるが、「イ」(イロ)共々、二本間の何らかのつながりを想定させる譜記と言えよう。

二二二二 その他の譜記

その他の譜記に関しては、用例が少ないため概略を述べるにとどめる。

「ハ」「シ」等の譜記の表す音の高低は、調査結果を見る限

り、線の表す音の高低に準じると考えて差し支えなさそうである。「ハ」(ハル)は、その名称・音価からして一般の譜本における「ハリ」に相当するものかと考えられる。今回調査対象とした名詞よりもむしろ助詞に付される用例が多く、そちらの面からの検討が必要であろう。一方の「シ」(シ)の右下に「シ」の文字)は、平曲譜本において普通「シ」(シ)の右横に「シ」の文字)で表される「シツミ」とはその示す音の高低も逆であり、同じものとは考えにくい。

「 \diagup 」「 \diagdown 」以外のハカセとしては、わずかに「 — 」が見られる程度である。この譜記は、少ない用例の中「実否 — 」(○○●)(32・口説)、「一首 — 」(○○●)(90・指声)等、促音を含む(二)拍に付されている例が目につく。

二二三 アクセント変化

二一で③に分類したものが古いアクセントを反映していると考えられる例としては、まず「心 — 」(10・口説)がある。「 \diagdown 」が表すと考えられる「●○○」型は、体系的変化以前にも以降にも、京都アクセントには存在しない型である。ただし「○○● \downarrow ○○」という体系的変化を起こした語の場合、その変化過程に「●○○」型の現れた時期があると言

われており、平安・鎌倉期「○○●」型であった「心」はこれに当てはまる。『平家正節』等にこの「●○○」型が出現するのは、最も古いアクセントを反映しているとされる「折声」という曲節においてであり(注三)、本文献で「口説」に現れることは注目される。尤も、該当箇所は曲節標示こそ「口説」であるものの、譜記の付けられ方がやや不審であり、「口説」における「●○○」型の確例とは言いきれない。それでも、『昭和本』における「○○●」(○○●)型出自の語の「●○○」型表記は、「拾」「下ゲ」「中音」等、「折声」以外の曲節に多数見られるのである(例：「ひとへ — イ」(163・拾)、「偏 — 」(182・下ゲ)等)。

この他に古いアクセントの可能性を持つものとして、「院」「事」「時」等、「●○○ — ×」の対応を示す用例がある。これらの語は体系的変化以前のアクセントが「 \diagdown ×」によって表されると考えられる「○○」型である。ただ大半は「 \diagdown ××」という譜記(後述)の下二拍であり、用例としての取り扱いに注意を要する。なお、「○○」型出自の語に明らかに「○○」を表す「 \diagdown 」という譜記が付されている例は「拾」「折声」等の曲節に見出される(例：「恥 — 」(169・拾)、「事 — 」(118・折声)。

音楽性の著しい「三重」は扱置くとして、語り口調に近く、アクセントをよく反映するとされる「白声」「口説」における一致率の低さが目立つ。

「白声」の場合、アクセント型により一致率に極端な差がでており、「●●」「●●●」「●●●●」はすべて一致しているが「●●○」「○○○」はほとんど一致しない。これは「白声」における数少ない譜記のほとんどが「〳〵〶」という形になっているためである。「〳〵〶」を除外すると、用例数は少なくなるがすべて一致率100%となる。

「口説」は用例数が多く、「白声」ほど極端な数値となつて現れることはないが、やはり「●●」「●●●」「●●●○」の一致率が高く、他が低いのは「〳〵〶」という譜記によるものである。口説から「〳〵〶」を除外した後の一致率は次のようである。()内は除外前の一致率。

●●	67%	(89%)
●●●	100%	(49%)
●●●○	100%	(83%)
●●●●	100%	(73%)
●●●●○	89%	(73%)
●●●●○	78%	(47%)
●●●●○	—	(100%)

●●○ 100% (26%)
 ○●● 70% (54%)
 ○●●○ 100% (50%)
 合計 88% (58%)
 「〳〵〶」で表される「●●●○」の用例は失われてしまうが、全体的に見ると、かなり一致率が高くなっている。「●●●」及び「●●●●」の一致率がやや低いのは「位語り」とも関係していよう(注六)。

譜記等の面で「白声」「口説」に比較的近いとされる「拾」にも多くの「〳〵〶」が付されており、この曲節も「〳〵〶」を除外すると「●●●○」以外のアクセントと譜記の一致率がほぼ完璧になる。

●●	100%	(100%)
●●○	100%	(78%)
●●●	100%	(100%)
●●●○	—	—
●●●●	100%	(100%)
●●●●○	—	—
●●●●○	0%	(0%)
●●●●○	—	—
●●●●○	100%	(100%)
●●●●○	100%	(100%)
●●●●○	100%	(60%)
●●●●○	—	—
●●●●○	100%	(100%)

○●○○ — —
合計 86% (78%)

つまり、「 \nearrow / \searrow 」という形の譜記が、アクセント型の判別を困難にしていると言える。この譜記の付される三拍語のアクセント型は、次のようである。

白声 ●●○○2例 ●○○○5例 ○●○○1例
口説 ●●●●6例 ●●○○34例 ●○○○40例 ○●●●2例
○○●●12例

「白声」「口説」とともに「●●○○」の他は「●○○○」を表すものが用例の大半を占めており、まったくアクセントを無視した付けられ方とも思われない。また、音楽性のほとんどない「白声」にも多いことから、音楽的旋律の影響も考えにくい。

「 \nearrow / \searrow 」という譜記を素直に解釈して得られる「●●○○」というアクセント型は、近代京都語において回避される傾向にあり、主に「●○○○」型に変化するが、その他の型(「●●●●」「○○○○」)になった例も多いとされる(注七)。平曲譜本内でも指摘されている「●●○○」「●○○○」「●●○○」「●●●●」「●●○○」といった型の揺れがこのような譜記に影響していた可能性は否定しきれないであろう。室町期以前のアクセントが明らかでない語については、『昭和本』の「 \nearrow / \searrow 」表記が

いわゆる平曲古譜本について

古態を示しており、『平家正節』等では新しいアクセントに変化していたと解釈することもできるのである。

さて、二—二—二—で『秦音曲鈔』と『昭和本』の譜記の類似について述べたが、この「 \nearrow / \searrow 」という形の譜記についても、それが「口説」に多く(『秦音曲鈔』の「白声」にはほとんど譜記が存せず、存する場合も別筆と思われる)、また必ずしも江戸期「●●○○」型の語に対応しないという点で二本に共通する特徴とすることが出来る。そしてこの三つひとまとまりの譜記もまた、前掲した波多野流節名目に「上々中」「二字上中」等という名で載せられているのである。

なお、「指声」「折声」といった曲節は、ともに「 \nearrow / \searrow 」という譜記を除外することにより一致率がそれぞれ81%↓100%、74%↓95%となる等、他の曲節についても、ある程度の操作を加えれば、かなり正確にアクセントを読み取ることが可能となる。

三 平曲古譜本としての『昭和本』

アクセント史料として見た『昭和本』は、古いと思われる点(中世期における京都アクセントの体系的変化以前、もしくはは

変化の過程にあつたと思われるアクセント型が見られる」と新しいと思われる点（低起式アクセントの遅上がりが見られる）とが混在している。一方、譜記の形や組合せといった面では、波多野流古譜本である『秦音曲鈔』との類似点指摘できたわけだが、この二本には、波多野流譜本の特徴とされる章段の異同等（注八）でも共通する点が見られる。遅上がりの例の見られることから、『昭和本』（及び『平家書』）の成立時代を室町にまで遡らせることについてはやや問題がありそうだが、『秦音曲鈔』に近い、波多野流古譜本である可能性は認められよう。『秦音曲鈔』の成立年代ははっきりしていないが、跋文から書写は享保十四年（一七二九年）と推定されており、それ以前の成立なのはまず間違いない。

以上、本稿では、「古譜本」を求める試みの一環として、『昭和本』の譜記についての検討を行なってきた。今後は、本稿で扱った『昭和本』及び『秦音曲鈔』の他、『平家書』『東北大学所蔵平曲譜本』等、古色が見られるとされながらも詳しい研究のない譜本についての考察を重ね、最終的には平曲譜本の発達過程を明らかにしたいと考える。

注一 金田一春彦氏所蔵（田辺尚雄氏旧蔵）『平家書』は金田一春彦氏により室町時代成立の可能性が指摘されている（『国語アクセントの史的研究』塙書房 昭49、『平曲考』三省堂 平9等）が、これに対し奥村三雄氏はその古色性を認めつつ、なお、曲節や譜記、詞章等の点から成立時代についての疑問を呈している（『平曲譜本の研究』20、54頁等 桜楓社 昭56）。『筑波大学（旧東京教育大学）所蔵平曲譜本』は波多野・前田両流分岐以前のものと言われ（渥美かをる氏「平曲の伝承」『平家物語講座2』所収 昭和32等）、『秦音曲鈔』は、同文同譜のものがほとんどの波多野流譜本の中で異色を示す古譜本とされている（奥村三雄氏「平曲譜本の研究」、波多野流平曲譜本の研究』勉誠社 昭和61等）。

注二 拙稿「『秦音曲鈔』の譜記に関する一考察」（『純真紀要』32号 平成3）参照。

注三 『平曲譜本の研究』536頁、『平曲考』37頁等参照。

注四 金田一春彦氏「古代アクセントから近代アクセントへ」

（『国語学』22 昭和30年9月）等参照。

注五 『平曲譜本の研究』328〜329頁等参照。

注六 『平曲譜本の研究』305、319、343頁等参照。音楽的な旋律の影響で高平調が低起式のように表記されたもので、アクセ

ント型とは無関係と見られる。

注七 『平曲譜本の研究』 351頁、金田一春彦氏「国語のアクセントの時代的変遷」(『国語と国文学』37—10 昭和35年10月)等参照。

注八 『波多野流平曲譜本の研究』 10頁に波多野流譜本の章段の配置特徴として挙げられている例(「我身栄花」の次に「妓王」が置かれている、「有王嶋下」と「僧都死去」が分離されている等の点)が『昭和本』にも見られる。

(おくむら かずこ・本学助手)

